手練

S H U R E N

第９号

公益社団法人　全国社寺等屋根工事技術保存会

表　紙

　会報名の手練（しゅれん）とは、熟練した手わざのことです。これからも、常に我々が文化財等の日本の屋根を守っているのだとの心構えを忘れず、会報名に恥じないような技術者になっていただくことを願って命名しました。

目　次

■檜皮採取者（原皮師）養成研修 第13期生 並びに
茅葺師養成研修 第1期生 修了式 ……2

■檜皮採取者（原皮師）養成研修 第14期生
茅葺師養成研修 第2期生 開講式 ……3

●来 賓 祝 辞　文化庁文化財部参事官　参事官付文化財調査官　**西山　和宏**
奈良県文化財保存事務所　工事監督　**猪又　規之**
和歌山県教育庁 文化遺産課　主査　**川戸　章寛**

●講 師 祝 辞　公益社団法人 全国国宝重要文化財所有者連盟　事務局長　**後藤 佐雅夫**

●研修生謝辞　檜皮採取者（原皮師）養成研修　第13期生　**毎熊　知也**
茅葺師養成研修　第1期生　**金谷　史男**

●激励の言葉　京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課　課長　**川妻　聖枝**

■文化財屋根葺士養成研修 第20期生 後期研修 始まる ……9

■檜皮採取者養成研修 第14期生 及び
平成25年度 檜皮採取中級研修 始まる …… 10

■平成25年度 文化財研修会 開催 …… 11

■主任文化財屋根葺士 検定会 実施される …… 12

■文化財屋根葺士養成研修 第20期生 後期終了 …… 13

■檜皮採取者養成研修 第14期生 及び
平成25年度 檜皮採取中級研修 終わる …… 14

■平成25年度 檜皮採取技術査定会 …… 15

■茅葺実技研修 …… 16

■平成25年度 茅葺きフォーラム 開催 …… 17

■温故知新　第7回「国宝 宇佐神宮本殿」…… 19
第8回「竹林山 常勝寺　檜皮採取」…… 22

■準会員 名簿 …… 26

■あとがき

檜皮採取者(原皮師)養成研修 第13期生 並びに 茅葺師養成研修 第1期生 修了式

期日 ■ 平成25年6月4日(火)
会場 ■ 京都市文化財建造物保存技術研修センター

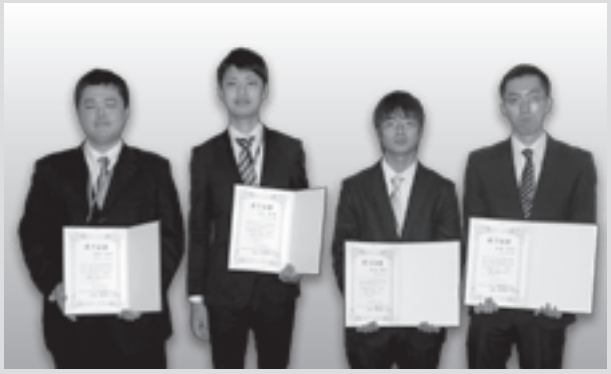
檜皮採取者(原皮師)養成研修の第13期生修了式並びに茅葺師養成研修の第1期生修了式を行いました。

修了生は、多数の御来賓者、関係各位のご祝辞に襟を正し、真剣に聞いておりました。今後、続けていかれる仕事の重要性や意義を理解し、各事業所に戻られても諸関係者の期待に添うよう頑張って頂きたいと思います。

研修に際しましてご指導を頂きました、各関係者様、講師の先生方には御礼申し上げます。

[檜皮採取者(原皮師)養成研修 第13期生]

- ●毎熊　知也 ／ ㈱小山社寺工業所
- ●西村　拓馬 ／ 田中社寺㈱
- ●藤吉　宏明 ／ 田中社寺㈱
- ●古川　和樹 ／ ㈲宮川屋根工業



[茅葺師養成研修 第1期生]

- ●瀬戸　龍哉 ／ 美山茅葺㈱
- ●金谷　史男 ／ ニシオサプライズ㈱

田中会長より修了証書授与

檜皮採取者(原皮師)養成研修 第14期生
茅葺師養成研修 第2期生 開講式

期日 ■ 平成25年6月4日(火)
会場 ■ 京都市文化財建造物保存技術研修センター

檜皮採取者(原皮師)養成研修の第14期生開講式、並びに茅葺師養成研修第2期生の開講式を行いました。

今年度は檜皮採取研修生が4名、茅葺研修生が4名でそれぞれのカリキュラムに沿って研修を受けることになります。最初は研修カリキュラムに戸惑うかもしれませんが、早く慣れて、それぞれの技術や知識を深めるためこの研修を有意義なものにして頂きたいと思います。

[檜皮採取者(原皮師)養成研修 第14期生]

- ●髙島　優雅 ／ ㈲社寺工芸大紀堂
- ●白川　将士 ／ ㈱児島工務店
- ●片岡　海舟 ／ ㈱児島工務店
- ●山城　直也 ／ ㈱友井社寺

[茅葺師養成研修 第2期生]

- ●瓜生　玉樹 ／ 美山茅葺㈱
- ●大野　沙織 ／ 美山茅葺㈱
- ●赤嶺　　怜 ／ ニシオサプライズ㈱
- ●伊東　洋平 ／ 山城萱葺屋根工事

京都市文化財建造物保存技術研修センター前にて

来賓祝辞

文化庁文化財部参事官
参事官付文化財調査官　西山　和宏

「檜皮採取（原皮師）養成研修第13期生並びに茅葺師養成研修第1期生修了式」、「檜皮採取（原皮師）養成研修第14期生並びに茅葺師養成研修第2期生開講式」にあたり、一言お祝いを申し上げます。

研修会を無事修了された皆さん、お疲れさまでした。長期間にわたる研修により、原皮師や茅葺師としての技術を修得し、またかけがえのない友人を得ることができたのではないかと思います。

また、新たに研修に参加される皆さんは、体調に留意し、向上心をもって有意義な研修としてください。

さて、近年、文化財建造物の保存修理現場を公開すると、多くの方が訪れるようになりました。また、テレビや雑誌等のメディアでも保存修理や技術者、技能者が取り上げられることが増えてきました。これは、文化財建造物の保存修理やそれを担う技術者、技能者に対して世論の関心が高まっていることによるものと思われます。

これまで文化財建造物の保存修理事業は、一般の方々からするとわからない部分が非常に多かったように思います。情報公開という時代の流れに従えば、文化財建造物の保存修理や保存していくための技術についても、広く一般の方々に知っていただくことが必要だと思います。知っていただくことで、その技術力の高さ、必要性についても認識してもらえるのではないかと思います。

そのためにも、受講者の皆様におかれましては、今回の研修で得られる技術や技能をもとに、今後ともそれぞれの実務を通して自己研鑽に努める一方で、保存技術の普及啓発にもご協力いただきたいと思います。

最後に、今後、大いに活躍されますよう祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

本日は、誠におめでとうございます。

来賓祝辞

奈良県文化財保存事務所
工事監督　猪又　規之

檜皮採取（原皮師）養成研修第13期生並びに茅葺師養成研修第1期生の皆さん、研修修了のお祝いを申し上げます。本当にご苦労様でした。またこれから研修を始められる皆さん、けがのないよう頑張ってください。

さて、奈良県は、保存会の皆さんの後継者養成や材料確保の努力に何ら協力もすることなく、ただその成果の恩恵に預かっているだけです。また、茅葺では今回の研修で技術伝授にあたられた選定保存技術保持者の隅田さんとそのお仲間の田中さんのお二人に頼り切っている状況で、ご挨拶させていただくのもおこがましいのですが、何か一言ということですので、以前から少し考えていたことをお話しさせていただきます。

建築技術に限らず、今日の技術という技術、すべてが経済性最優先となり、培ってきた「わざ」の数々は忘れ去られ、文化財修復でのみその「わざ」が発揮されるというのが実情でございます。とりわけ屋根工事においてはそれが顕著だと思います。少々無理な勾配であっても、金属や合成系素材で解決されてしまいます。屋根勾配との戦いの中で実現される優美な軒の曲線等、屋根工事にとっての根幹である技術や知恵を発揮する場は、植物性素材や瓦による屋根葺と規定される文化財修復に限られることになるでしょう。

奈良県には、飛鳥・奈良時代の建物をはじめ、鎌倉・室町の国宝、重要文化財も多数あり、後世改造された屋根葺材をもとのものに戻すという復原が時々行われます。もとの葺材は文書や僅かな葺材屑でのみ判るということが多くあります。木工事で定まる野地の曲面上に、その葺材をどう実現するかという際、屋根葺を多数こなしてこられた葺師さんに意見を求める、というよりは、道具皮の加工や下地調整、瓦では特殊瓦の形状等、実際は全くお任せというのが実情なのです。葺師さんの経験と知恵があってこそ、屋根復原の実現が可能というのが実際かもしれません。

本日研修の修了を迎えられ、原皮師、茅葺師としての第一歩を歩み出される皆さん、早く現場経験を積まれ、「ここを納めるにはこうしかないです」等と断言できる程の技術者になることを目標の一つに掲げられ、頑張っていただくようお願い申し上げます。

本日は、誠におめでとうございます。

来賓祝辞

和歌山県教育庁
文化遺産課
主　査　川戸　章寛

本日、檜皮採取者養成研修並びに茅葺師養成研修の修了式・開講式が、このように盛大に開催されますこと、誠におめでとうございます。田中会長様はじめ、保存会の皆様方、また、研修において講師を勤められました先生方はじめ関係者の皆様方の御尽力に対し、心より敬意を表します。

さて、本日、養成研修を修了される６名の研修生の皆さん、長期にわたる研修、お疲れ様でした。この間、仕事と研修の両立は本当に大変であったと思われますが、研修においては、普段の仕事とはまた違った刺激の多い毎日ではなかったかと思います。お世話になった多くの方々への感謝の気持ちを忘れずに、今後は、それぞれの仕事場で、更なる研鑽に努めていただきたいと思います。

また、これから養成研修を受けられる、檜皮採取者（原皮師）第14期生の皆さん、茅葺師第２期生の皆さん、健康に留意し、長期にわたる研修を、実り多きものとなるよう頑張ってください。

ところで、私が仕事をしております和歌山県では、一昨年の9月に台風12号が襲来し、県南部の文化財建造物の多くが被災いたしました。被災直後は、交通が遮断し、現地に入ることすら難しいような状況で、改めて自然災害の恐ろしさを感じたところでございます。その被災地の中に、ちょうど、檜皮の葺き替えを含む修理事業の真っ最中、という現場がございました。従事されていた職人の方は、本当に恐ろしい、大変な思いをされたことと思いますが、幸い現場そのものに被害はなく、その後も引き続き作業をしていただきました。そして、当初の予定に遅れることなく竣工の運びとなり、県といたしましても、大変感謝しているところでございます。

また、被災した物件では、地域全体がまだ復旧作業中という厳しい環境のなかで、各種の職人の方々に災害復旧の工事に当たっていただき、現在では、文化財建造物の復旧事業は一段落ついた状況でございます。

こうした非常事態では、皆さんが日々研鑽されている技術が、特に発揮される場面であります。平生の地道な努力の積み重ねがあってこそ、緊急の事態にも対応できるのだと思いました。

今回、研修を終えられた方も、これから研修を始められる方も、一日一日を大切に、技術の習得に努められることを期待します。日本の伝統的な美しさを未来へ伝えていく重要な仕事である、そうした誇りを胸に、日々頑張っていただきたいと思います。

以上、簡単ではございますが、研修生の皆さんの今後の活躍に期待するとともに、保存会の益々のご発展を祈念し、お祝いの言葉とさせていただきます。

本日は、本当におめでとうございました。

講師祝辞

公益社団法人
全国国宝重要文化財所有者連盟
事務局長　後藤 佐雅夫

檜皮採取者（原皮師）養成研修第13期生並びに茅葺師研修第１期生修了式・檜皮採取者養成研修第14期生並びに茅葺師研修第２期生の開講式にお招き頂き誠にありがとうございます。研修を修了された皆様およびこれから研修される皆様に心からお祝い申しあげます。

檜皮葺師・原皮師の研修の講師を依頼されてから、半世紀の長きに亘っており、現在、役員をされているほとんどに私の講義を聞いて頂いています。

本日、研修を修了された方は、堂々と第一線で活躍されるわけですが、これからは個人的にも施主や監督の指導を直接受けなければなりません。私の監督時代は、檜皮・柿板の材料の束を解き１枚宛検査しました。施工にあたっても詳細な指導を行ってきましたが、最近は材料・施工に対して厳しさが不足しているように思います。原皮師は危険な仕事であり、ブリ縄だけがたよりであります。近年も落下事故があり、車椅子の生活をされています。気の緩みや心の油断がとんでもない事故になるのです。今日は葺師の方は見えていませんが、苦労して剥かれた皮を1枚たりとも無駄にしてはなりません。先程、センターの研修場で仕事をされていましたが、相当無駄皮が出ていました。軒付皮にも出来ない皮拵えは考えものです。

さて、茅葺師の皆様にお願いしたいことがあります。丹波市山南ふるさと文化財の森センターで検定試験をさせて頂きますが、締め込みが非常に弱いのです。所有者から、最近の茅葺は緩く葺かれているため、カラス等の被害に遭い、護衛手段として全面にネットを張りめぐらしているとのことで、格好の良いものではありません。緩いと鳥類などの被害にも遭いやすいのです。1日でも長くもたす工夫が必要かと思います。

檜皮採取者も原木に対して愛情をもって接して頂きたいのです。剥いたあと、甘皮の傷が目立っている所もあります。次の皮剥きのことを大切に考えてください。どの社会でも慣れが事故を起こします。何度も同じことを申し上げるようですが、仕事に対する取り組み方、仕事に対する愛情、仕事に対する工夫、それが明日への技術向上につながるのです。

その基盤の一つは家庭です。家族の協力なしでは良い結果は出ません。家に帰ってからの30分、今日の仕事の反省、明日の段取りや計画に費やし、それを終えてから家族の団欒、奥様手製の夕食を楽しんでください。

世界に誇る国宝・重要文化財の修理を担っておられる皆様だからこそ敢えて苦情を申しましたが、お目出度いお祝いの席でこのような苦言を呈して申し訳ありません。何れにしましても十分に健康に留意され、今後の皆様のご活躍を心よりお祈り申し上げております。

本日の修了式・開講式に出席させて頂きましたことに感謝し、心からお喜び申し上げ、講師を代表しての祝辞とさせて頂きます。

研修生謝辞

檜皮採取者（原皮師）養成研修
第13期生
㈱小山社寺工業所　**毎熊　知也**

研修生を代表してあいさつをさせて頂きます、小山社寺工業所の毎熊知也です。

研修に参加させて頂く前は、こんな私でも皮剥きという仕事をやっていけるのだろうかと不安だらけでした。しかし、研修に参加させて頂き、講師の皆様からのご指導により、そんな思いは少しずつ自信へと変わっていきました。これからは色々教わった事を会社で生かして一人前になれるようがんばっていきたいと思います。

最後に、指導してくださった講師の方々、保存会関係者の皆様、大変お世話になりました。ありがとうございました。

研修生謝辞

茅葺師養成研修
第１期生
ニシオサプライズ㈱　**金谷　史男**

茅葺師養成研修第１期生として勉強させて頂くにあたり、多くの方々にご指導、ご支援頂きましたことを、心より感謝申し上げます。

社寺建築についての基礎知識や、全国の茅葺工事の事例など､我々にとって身近かつ必要な情報でありながら、日々の現場では改めて学ぶ機会の少なかった事柄を、講師の方々は丁寧に教えて下さいました。また、清水寺や東本願寺の改修現場、桂離宮等、いち個人では立ち入ることの難しい場所にも入らせて頂き、現場の生の声を聞きながら勉強出来たことは、貴重な体験となりました。

秋、神奈川県の日向薬師における実技研修では、選定保存技術者である隅田さんから、１ヶ月の長きに渡り直接指導を受けることが出来ました。隅田さんからは茅葺の技術のみならず、長きのご経験によるエピソード他、ためになるお話をたくさん聞かせて頂きました。隅田さんと身近に接し、他の研修生と切磋琢磨し合いながらひとつの現場を完成させていった１ヶ月は、その後の茅葺師としての生活に大きな影響を与えています。

まだまだ浅学な私たちには学ぶべきことが山ほどありますが、茅葺師養成研修の第１期修了生としての名に恥じることのないよう、この１年の研修の成果を活かし、精進して参りたいと思います。今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い致します。

貴重な勉強の機会を与えて下さった講師の方々、隅田さんはじめ、保存会関係者の皆様に、この場を借りて感謝申し上げます。ありがとうございました。

激励の言葉

京都市文化市民局
文化芸術都市推進室
文化財保護課
課長　川妻　聖枝

本日は、第13期檜皮採取者（原皮師）養成研修生の毎熊知也さん、西村拓馬さん、藤吉宏明さん、古川和樹さん、また、昨年からはじまりました茅葺師養成研修の第1期生の瀬戸龍哉さん、金谷史男さんにおかれましては、無事研修修了されましたこと、誠におめでとうございます。1年間ご苦労様でした。

また新たに第14期檜皮採取者（原皮師）養成研修生として、高島優雅さん、白川将士さん、片岡海舟さん、山城直也さんの4名の方々、そして2年目を迎えます茅葺師養成研修では、瓜生玉樹さん、大野沙織さん、赤嶺怜さん、伊東洋平さんの4名の方々をお迎えしました。誠に喜ばしいことで、研修生の皆様は、体に気をつけて頑張っていただきたいと存じます。

さて、皆さまご承知の通り、文化財の保存のための技術継承を取り巻く社会環境は、年々厳しくなってきています。

昭和50年に文化財を守るための技術が、「文化財の保存技術」として保護の対象になりました。というのも、昭和30年代から昭和40年代にかけてのいわゆる高度成長の時期に、社会や自然環境の状況もかなり大きく変化し、その中で建造物や美術工芸品等の修復を行う技術者の減少、高齢化が顕著となりました。また、修理するにも、資材・原材料を確保することが困難になるなど、文化財の保存そのものに大きな支障をきたすおそれが生じたことから、文化財保護法の改正が行われ、文化財の保存技術が保護の対象となりました。

そうした時代から、すでに40年近くを経ようとしています。社会的な風潮としては、経済偏重であった高度経済成長期から比べれば、現在は文化的な事業に対する社会的な理解は進んだといえるかと思います。一方で、伝統的な建造物に必要な資材の調達といった、至極物理的な状況は必ずしも好転はしていません。それどころか、40年前にはまだ見出すことのできた資材も、手をかけ資金をかけて育てていく時代になってきました。たとえば屋根材に使用した小麦藁なども、かつては麦作をする中で自然に生まれる資材の再利用で賄えましたが、今では計画的に確保する必要が生じています。こうしたことひとつをとっても、文化財建造物を守るためには日常的な生活や生業とは区別した、特別なマネージメントが必要であります。そういう意味でも、全国社寺等屋根工事技術保存会様のお取り組みは、今後ますます多様なものになっていかれるような気がしております。

京都市では、文化庁のご援助を得て、ここ京都市文化財建造物保存技術研修センターを設置し、文化財建造物の保存技術継承の場、学びの場となるように応援させていただいてまいりました。早いもので、当センターは、今年の8月に開所10年を迎えます。ここで学ばれた方も、これまでで100名余となり、全国の文化財修復の現場で御活躍いただいております。また、当センターが、開所当初より全国社寺等屋根工事技術保存会様に管理運営をお願いして、屋根工事に限らず、全国の文化財保存技術者の研修にご利用いただいておりますことは、まことに喜ばしいことであります。

文化財は、地域や国家の文化を象徴化する存在として、確実に保全していかねばなりません。そのためにも文化財の保存技術の継承は、非常に重要であり、今後とも皆様と連携し取り組んでまいりたいと存じます。特に、研修を受講、あるいはこれから受講される方々は、文化財の保存技術者としてますますの研鑽に励んでいただき、将来の文化財保存の担い手として御活躍されますことを祈念いたします。

本日はまことにおめでとうございます。

文化財屋根葺士養成研修 第20期生 後期研修 始まる

平成24年4月にスタートした文化財屋根葺士養成研修第20期生の後期日程が平成25年6月3日より始まりました。

2ヵ年で一期となっているこの研修は、半年間各事業所での研修期間を過ごしており、研修生も各々に成長した姿勢で後期研修に臨んでくれるものと期待しています。

後期は檜皮・柿葺の現場実習をはじめ、建築史演習、座学では重点的に実測・製図に取り組みます。屋根の事だけでなく、違った視点からも幅広く指導していただける時間になると思います。また、卒業現場実習を当保存会賛助会員春日大社様の貴賓館で檜皮葺屋根の葺替をさせていただく予定でおります。研修生にとっては、仕事の流れを最初から最後まで経験出来る機会になるので、悪戦苦闘しながらも一心に取り組んでほしいと思います。

第20期後期におきましても、関係各位の御指導・御協力をよろしくお願い申し上げます。

■研修プログラム

	科　目	履 修 科 目
講義	専門科目Ⅰ	労働安全衛生法
		文化財保護法
		日本建築史
		日本建築の構造と仕様
		原材料性質と種類
		解体・保存法
		製　図
	専門科目Ⅱ	原材料採取方
		材料整形方
		専門工法
		積算・仕様・工程管理
		建築史演習
	特別科目	特別講義
		建物管理
実習	実　習	実　測
		材料整形
		葺実習・現場実習

屋根葺実習

皮切り実習

座学

檜皮採取者養成研修 第14期生 及び 平成25年度 檜皮採取中級研修 始まる

平成25年度の檜皮採取者養成研修事業は、今年度も4名の研修生が入講し、8月20日から京都市文化財建造物保存技術研修センターで、座学やへら作りを行った後、8月26日より福井県越前市の大瀧神社の社有林において、実技研修を開始致しました。荒皮での採取研修になりますので、初めて作業を経験する者にとっては、葺材料として価値のある檜皮を採取することは大変難しい作業になりますが、檜皮葺にとって大変重要な仕事ですので、しっかりと基本を身に付け色々な講師の技術を学んでほしいと思います。

また、中級研修生については、今年度は32名で岡山県内にある民有林での黒皮採取の研修をかわきりに、国有林での黒皮・荒皮の採取研修を行っていきます。技術レベルの高い者は初級研修生の指導にも当たってもらいます。人に指導する事により自分の技術をもう一度見直し、いっそうの技術のレベルアップにもつながると思います。

国有林をはじめ山林所有者の方々には今後ともご理解とご協力をお願い申し上げます。

第14期研修生は下記の4名です。

［檜皮採取者初級養成研修
第14期生］

- 髙島　優雅
  ／㈲社寺工芸大紀堂
- 白川　将士
  ／㈱児島工務店
- 片岡　海舟
  ／㈱児島工務店
- 山城　直也
  ／㈱友井社寺

平成25年度
文化財研修会 開催

期　日 ● 平成25年9月27日㊎
会　場 ● 高岡山 瑞龍寺（ずいりゅうじ）
（富山県高岡市関本町35）

本年度は前田家と縁の深い瑞龍寺で開催いたしました。保存会正会員・準会員、諸関係各者、約70名の参加者の下、現場見学と講演会を開催しました。保存修理現場見学では（公財）文化財建造物保存技術協会 賀古唯義様に説明を頂き、「伽藍瑞龍」と呼ばれる美しい伽藍を回りながら建築構造、修理概要などの説明を受けました。地方色や時代変遷、これまでの修理工事での問題点など、様々な角度からお話を頂きました。

また、講演会では副住職の四津谷道宏様にご講話を頂き、瑞龍寺が建立されてから今日に至るまでの変遷についてを学ばせて頂きました。時折、落語調の語りを織り交ぜながら話され、参加者からは笑いが漏れる場面も多く、皆一様に興味深く拝聴しておりました。お話の中にありました文化財建造物、歴史を途絶えさせることなく後世に引き継いでおられるご苦労は大変なものと感じましたし、四津谷様を始め瑞龍寺の皆様の熱意と努力には感銘を受けた次第です。

毎年、いろいろな場所を回り研修会を開催しておりますが、当保存会に対する期待は非常に大きいと常々感じております。今後もこういった活動を続け、資質の向上に努めてまいりたいと思います。

最後になりましたが公務ご多忙の中、我々の研修会にご協力を頂きました（公財）文化財建造物保存技術協会様、そして貴重な研修場所をご提供頂きました瑞龍寺様に紙面をもちまして厚く御礼申し上げます。

四津谷（よつや） 道宏（どうこう） プロフィール

- 1969年富山県高岡市生まれ。
- 駒澤大学仏教学部を卒業。
- 大本山総持寺で修行。
- 平成５年から瑞龍寺副住職になる。
- 瑞龍寺において、落語的拝観説明が好評となり、各地で講演活動を行う。
- 瑞龍寺でコンサートやライトアップなどを企画し、ボランティア活動も積極的に行い、開かれたお寺の形を模索中。
- 個人的には、学生時代からの機械好きが高じて電気自動車を製作・登録もさせて、環境問題にも取り組む。

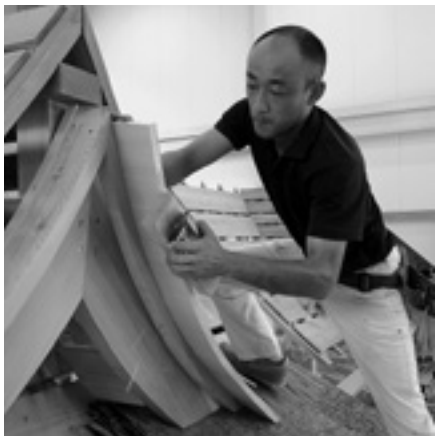
伽藍瑞龍の仏殿

主任文化財屋根葺士 検定会 実施される

檜皮・柿葺【第13回】● 平成24年7月9日㈪～14日㈯／2名（檜皮葺師1名、柿葺師1名）

平成25年度、第13回主任文化財屋根葺士検定会を兵庫県丹波市の丹波市山南ふるさと文化財の森センターにて行いました。今回の受験者は計2名で両人とも合格されました。第14回の検定会を11月に予定しておりましたが、申込者が定員に満たず中止といたしました。また、茅葺師の検定会も第６回を計画しておりましたが、受検対象者が定員に満たず、このことから2年に1回の開催へ変更となり、次年度に第６回を計画しております。

平成26年度検定会においては皆様の多数の申込をお願いいたします。



主任文化財屋根葺士 認定証 更新講習会 開催

平成25年度、主任文化財屋根葺士認定証更新講習会を平成25年11月18日（月）に京都市文化財建造物保存技術研修センターにて行いました。今回の受講者は平成19・22年度に認定を受けた正会員15名、名誉会員3名、準会員14名の合計32名でした。

当日は（公社）全国国宝重要文化財所有者連盟事務局長の後藤佐雅夫様を講師に招き日本建築史、神社建築などの講習を受けた後、講習内容についての試験を行いました。受講者32名は皆合格され、新たな認定証が発行されることとなりました。

文化財屋根葺士養成研修 第20期生 後期終了

平成25年6月に開始した文化財屋根葺士養成研修第20期後期日程が12月16日に無事終了することができました。

後期は檜皮長皮の材料整形を含め、檜皮葺・柿葺の現場実習、そして京都センター内の檜皮葺模型を使った実測・製図では、13日間（104時間）かけて実写スケッチから烏口による墨入れまで指導いただきました。屋根だけでなく、建物全体のバランスを学ぶ良い時間になったと思います。また、当保存会賛助会員 春日大社様の貴賓館檜皮葺屋根葺替工事を卒業実習とし、特別講義では茅の研修生と合同で茅葺についても学びました。建築史演習では滋賀、奈良、京都に所在する檜皮葺等建造物の建築様式を時代別に見学していく貴重な時間を過ごし、1136時間の全研修日程を終了しました。研修生も意欲的に取り組み、前期開始時を思うとしっかりとした成長ぶりに目を見張るものを感じました。

ですがこれからが始まりで、各事業所に戻っても縁あって同期となった仲間を大切に、お互いに切磋琢磨して良い職人になってもらいたいと思います。

研修指導にご尽力いただきました講師の先生方をはじめ、関係各位の皆様にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

【文化財屋根葺士養成研修 第20期生】

- 内田　祐太／（株）児島工務店
- 松村　省弥／（株）松村工務店
- 吉川　智庸／（株）村上社寺工芸社

檜皮葺現場実習

柿葺現場実習

製図作成のための実測

小屋組の説明を受ける研修生

（公社）全国国宝重要文化財所有者連盟 事務局長　後藤佐雅夫様による建築史演習

檜皮採取者養成研修 第14期生 及び 平成25年度 檜皮採取中級研修 終わる

平成25年度の檜皮採取初級研修は、8月20日より京都センターで4日間の座学研修を受け、その後、8月26日より福井県の大瀧神社境内林の檜林を皮切りに実技研修に入りました。以降、河内長野市市有林、中部森林管理局内国有林、近畿中国森林管理局内各国有林での実技研修、また12月には丹波市市有林での査定会にも参加し、2月10日からの九州大学演習林での実技研修まで11クール約6ヶ月に及ぶ長期間の研修を終了しました。各指導員より受けた実技指導を1日でも早く身につけられるよう今後も仕事に取り組み一人前の職人になれることを期待します。

また中級研修も8月26日の岡山県美作市の民有林を皮切りに、近畿中国森林管理局内の和歌山県の権現山、京都府の鞍馬山、広島県の野路山、奈良県の野山、山口県の城山、中部森林管理局内の賤母の各檜山で黒皮と荒皮に分かれ、2月21日までの全14クールを終了しました。国有林はもとより、研修林を提供していただいております森林所有者の方々には感謝申し上げますとともに、今後ともより一層のご理解、ご協力をお願い申し上げます。

中級研修

初級研修

平成25年度
檜皮採取技術査定会

期　間 ● 平成25年12月2日（月）～3日（火）
会　場 ● 兵庫県丹波市市有林（兵庫県丹波市山南町）

檜皮採取技術査定会は、檜皮採取研修生の日頃の研修の成果を査定するとともに、技術の継承と向上を目的として、毎年行っています。当日は丹波市教育委員会 教育長 小田繁雄様もお越しになり査定会を受ける研修生に対し激励の挨拶を頂きました。

査定を受ける研修生は初級研修生４名を含む18名の参加で、査定には指導員２名とAクラス研修生指導補助員4名の合計6名が査定員としてあたりました。今年度は12年前に荒皮を採取し今回が2回目の採取である、黒皮となった檜を対象として査定会が行われ、研修生は、日頃の技術の成果を発揮できるよう一生懸命作業に取り組んでいました。

今回査定を受けられた方の個々の技術ランクは、この２日間の査定会での採点と、年2クールの参加する採取研修での年間実績考課値を加味して決定し、来年度の中級者研修に参加してもらうことになります。

今回査定会にご協力頂きました丹波市の方々には感謝申し上げますとともに、今後ともご理解、ご協力をお願い申し上げます。

激励の挨拶　丹波市教育委員会 教育長　小田繁雄様

茅葺実技研修
「技術継承は職人の意識改革から」

期　間 ● 平成25年11月25日(月)～12月8日(日)
場　所 ● 圓山記念日本工藝美術館
（兵庫県姫路市西今宿１丁目 1-8）
期　間 ● 平成26年1月20日(月)～2月13日(木)
場　所 ● 三溪園
（神奈川県横浜市中区本牧三之谷 58-1）

全国社寺等屋根工事技術保存会では、先人より受け継いだ茅葺技術の継承と日本古来よりの伝統文化の引き継ぎの意味も兼ねて年間2、3回の茅葺実技研修を行っています。今年度の研修は圓山記念日本工藝美術館内の山門、三溪園内の横笛庵にて行いました。植物性材料を用いた日本の伝統的な屋根の中でも、特に茅葺は地方性が強く、葺き方はもちろん、軒や棟の形式は誰が見てもわかる程多種多様です。

昔茅葺屋根は、その土地で採れる材料を用い、その土地の職人達の手によって葺き替えられておりました。それが時代とともに大きく変わり、茅葺屋根も減り、同時に職人も減っていきました。１級建築士でさえ各都道府県に3000人以上いると言われている中、茅葺職人は全国を見渡しても数百人しかいません。

今まさにこの多種多様な技術をどう引き継いでいくかが、緊急の課題です。そして職人達も自分達の在り方について、考え直さなければならない時に来ています。それぞれの地域の職人が姿を消していく中、以前より広い範囲の仕事を請け負うようになり、一つの地域の葺き方だけを知っていれば良いという訳にはいかなくなりました。できるだけいろいろな屋根を触りその技術を学ぶだけではなく、その背景にある環境的、文化的な要因をも理解して屋根を葺いていく必要があります。さらに茅葺屋根について図面や、自らの言葉を用いて、他者に説明する能力も必要になってきました。

そんな状況の中、毎年開催している茅葺きフォーラムでさえ、参加する職人は50人程度です。今後は職人一人ひとりの意識を上げ、今以上に自覚と責任を持てるよう、後継者育成と茅葺の継承に微力ながら力を費やしていく所存です。

この数十年間の経済発展と共にあっという間に失われていった茅葺屋根や、先人達の遺産を今更取り戻すことはできません。せめて現存している茅葺屋根は大切に引き継いでいきたいと思っております。そしてそのことが日本の宝となり、世界からも評価される時がまもなくやってくると信じております。

茅葺担当理事　中野　誠

三溪園内　横笛庵

圓山記念日本工藝美術館内　山門

平成25年度
茅葺きフォーラム　開催

平成25年度の茅葺きフォーラムは、約50名の参加者のもとに行われ、初日は三溪園内、横笛庵にて行われている茅葺研修と園内建物を公益財団法人 三溪園保勝会 参事の川幡留司様と事業課長の中島哲也様のご説明のもと見学させていただき、翌日は、園内鶴翔閣にて協議会が行われました。

協議会では、川幡様に「原家初代・二代による造園と三溪園を舞台にしての（原三溪）諸活動」の内容で講演いただき、そのあとの事例発表は茅葺師連絡協議会会長の塩澤実様より「茅葺の未来について考える」という内容で発表していただきました。その後討論会に入り、地域と密接な茅葺本来の維持の仕方、地域性など協議されましたが、時間の関係で十分な議論が出来なかったことが課題として残りました。次会には充分な時間を取り、茅葺の未来を考えていく為のさらに深い協議をしなければならないと感じました。

しかしながらこのような素晴らしい庭園と建物を前にして今回の茅葺きフォーラムが盛大に行われましたことを大変うれしく思います。文化庁の西山和宏調査官、公益財団法人 三溪園保勝会の皆様をはじめ各関係者の皆様にはこの場を借りてお礼申し上げます。

協議会場となった三溪園　鶴翔閣

見 学 会　平成25年1月29日（水）

見学場所 ● 三溪園（神奈川県横浜市中区本牧三之谷58-1）
建物説明 ● 公益財団法人 三溪園保勝会　参事 **川幡　留司**、事業課長 **中島　哲也**

協 議 会　平成25年1月30日（木）

協議会場 ● 三溪園内　鶴翔閣（神奈川県横浜市中区本牧三之谷58-1）
［総合司会］公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会　**中野　　誠**
開会挨拶 ● 公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会　会長 **田中　敬二**
来賓挨拶 ● 文化庁 文化財部参事官付　文化財調査官 **西山　和宏**
● 公益財団法人 三溪園保勝会　理事長 **内田　弘保**
講　　演 ● 公益財団法人 三溪園保勝会　参事 **川幡　留司**
題目「原家初代・二代による造園と三溪園を舞台にしての（原三溪）諸活動」
事例発表 ● 茅葺師連絡協議会　会長 **塩澤　　実**
題目「茅葺の未来について考える」
討 論 会 ● ［司会］公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会　**杉山　信義**
総　　評 ● 文化庁 文化財部参事官付　文化財調査官 **西山　和宏**
閉会挨拶 ● 公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会　副会長 **村上　英明**

見学会

中島哲也様による建物説明

研修中の茅葺工事の見学

協議会

来賓挨拶　文化庁　西山和宏様

来賓挨拶　三溪園保勝会　内田弘保様

講演　三溪園保勝会　川幡留司様

事例発表　塩澤実様

活発に行われた討論会

温故知新

現場レポート

第７回

国宝 宇佐神宮本殿

［正会員］㈱小山社寺工業所
［準会員］河野 修二郎

左から一之御殿、その奥に二之御殿、三之御殿と続く

当保存会の会員によって施工されている、現場の様子をお伝えする「温故知新」。今回も建造物の歴史や特色、現場での苦労話等、生の声をお届けして参ります。

華麗な八幡造の社殿

大分県北部、国東半島の付け根に立つ御許山（標高647m）山麓に鎮座する宇佐神宮は、全国八幡社の総本宮です。

御祭神である八幡大神さまは応神天皇のご神霊で、571年（欽明天皇の時代）に初めて宇佐の地にご示顕になったといわれます。応神天皇は大陸の文化と産業を輸入し、新しい国づくりをされた方です。725年（神亀2年）、現在の地に御殿を造立し、八幡神をお祀りされました。これが宇佐神宮の創建です。

宇佐の地は畿内や出雲と同様に早くから開けたところで、神代に比売大神が宇佐嶋にご降臨されたと『日本書紀』に記されています。比売大神さまは八幡様が現われる以前の古い神、地主神として祀られ崇敬されてきました。八幡神が祀られた６年後の731年（天平３年）に神託により二之御殿が造立され、宇佐の国造は比売大神をお祀りしました。三之御殿は神託により、823年（弘仁14年）に建立されました。応神天皇の御母、神功皇后をお祀りしています。一之御殿より三之御殿に至る３棟を本殿とします。現存する社殿は1855～1862年（安政２年～文久元年）にかけて造営されています。

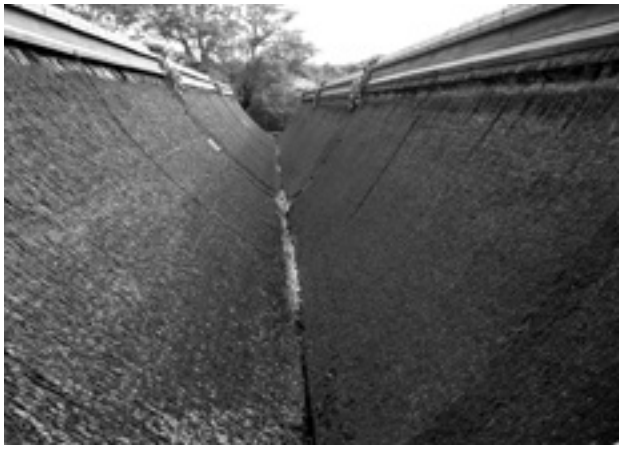
八幡造は、２棟の切妻造平入の建物が前後に接続した形で、両殿の間に一間の相の間（馬道）がつきます。奥殿を「内院」、前殿を「外院」といいます。各棟とも内院が桁行三間、梁間二間、一重切妻造、外院は桁行三間、梁間一間、一重切妻造、向拝一間（但し二之御殿はなし）檜皮葺です。軒付は二重軒付、内院正面軒と外院背面軒を近接させ、その下に内樋を掛け各殿登軒も接近しています。下軒付には共蛇腹を使用しています。

前回の屋根葺き替え工事から30年余りが経過し、品軒は抜け落ち、軒先は葺き地がなく水切銅板が丸出し状態になっていました。尚、漆塗り及び金物の補修工事も並行して行っています。

（宇佐神宮ホームページより一部抜粋）

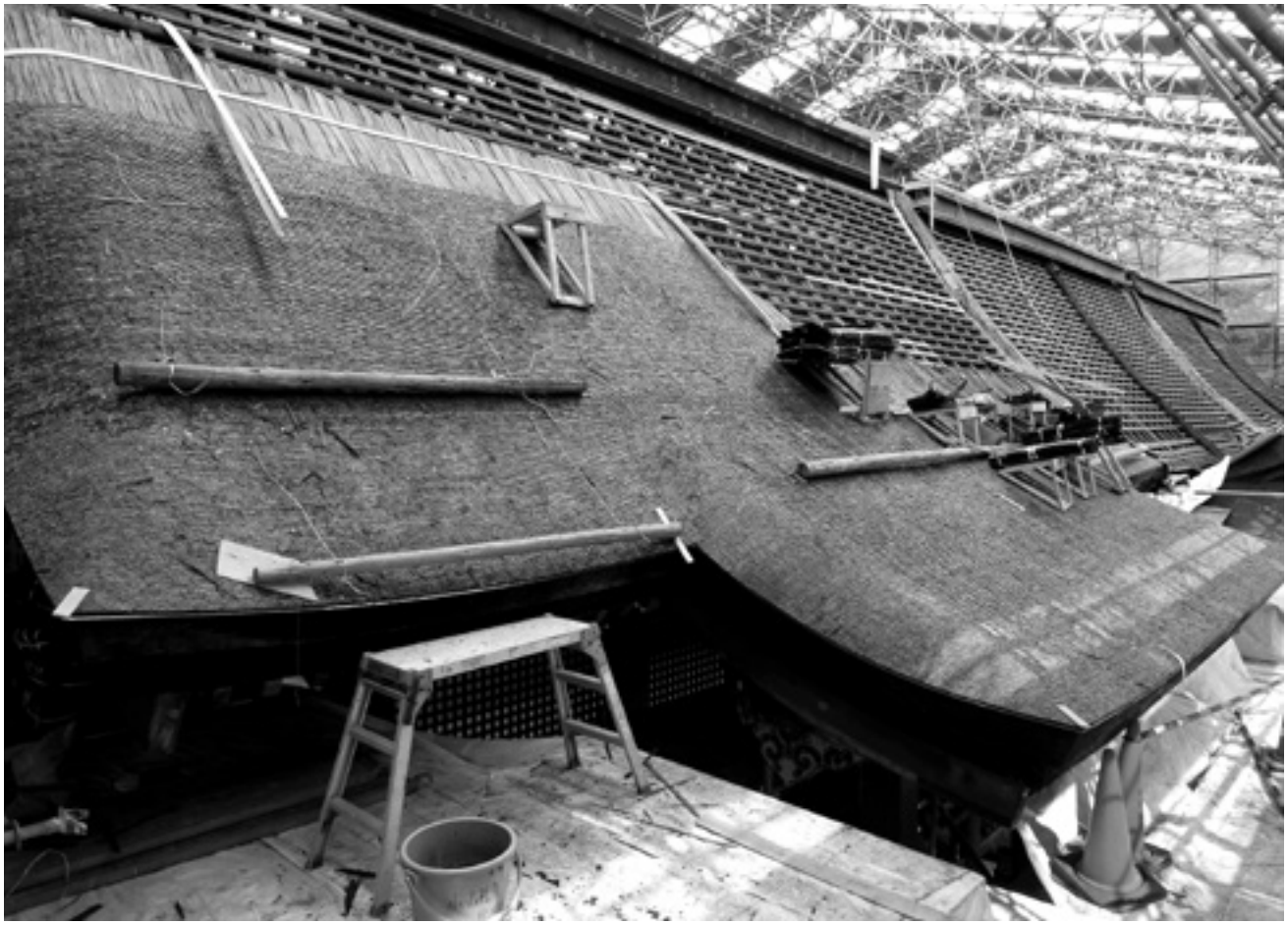
名　　称●八幡総本宮 宇佐神宮 本殿
場　　所●大分県宇佐市大字南宇佐2859
構造形式●八幡造、檜皮葺
前回葺替●昭和59年（1984）

施工時の記録



1 内院と外院の両軒に接するところに大きな銅（金箔）の雨樋が通っています。

3 共蛇腹取り付け後、木口をチョンナで切り仕上げます。



2 今回、軒付は部分修理とし、主に留め軒近接部の破風軒などを施工します。

4 共蛇腹は割れのない良質な厚皮を選(よ)ります。指定の寸法に断ち、傍は鉋(かんな)をかけて仕上げます。

7 下軒は共蛇腹です。上軒は裏板ではなく、厚皮を下軒より１寸ほど出します。裏皮、または台皮と言ったりしているものです。

5 一之御殿と二之御殿の間、二之御殿と三之御殿の間の４留め集合部です。部分補修ではありますが、各所留め部をどうやって施工しようか…悩みどころです。

8 なぜ、こういう形状にしたのか？こんなにくっつけるくらいならいっそ一屋根にしたらどうか、と施工しながらつくづく思います。理由はもちろんあるのでしょうが、この特殊な屋根形状こそが国宝 宇佐神宮本殿の八幡造なのです。この八幡造は、指定物件としては全国に4例しかありません。このような現場で仕事をさせてもらえることに誇りを持ち、頑張っていきたいと思います。

6 八幡造は屋根同士が非常に近接しています。特に軒付及び箕甲の施工、また破風の曲線を出すのが非常に困難です。

温故知新

現場レポート

第8回

竹林山 常勝寺（しょうじょうじ）

檜皮採取

［正会員］大野 浩二

当保存会の会員によって施工されている、現場の様子をお伝えする「温故知新」。今回は、施工に必要な資材である檜皮を竹林山 常勝寺で採取したときの様子をお届けします。

由緒ある常勝寺の歴史と檜木

竹林山 常勝寺は孝徳天皇の大化年間（645～650）はるかインドより渡来した法道仙人により開基され、寺運日増しに栄え、僧坊七十余りの一山地となりましたが、永保年間（1081～1084）の出火により、堂塔すべて焼失しました。その後、泉州槙尾山の浄意上人が来山して、本堂はじめ諸堂を建立されたが、天正三年（1575）戦国動乱の兵乱により全山堂宇残らず焼失（じげん）しました。

慶長十三年（1608）の記録には慈眼院はじめ十箇坊の名が記されています。当山住僧智光法印が再建に着手しましたが工半ばにして遷化。その後、時運至ず空しく星霜（せいそう）を重ね、大塔中堂は中絶し、ご本尊等は山麓の里坂本の小字に安置し、里人により護持（ごじ）されておりました。元禄十年（1697）ようやく良海法印が本堂を修復し、寺坊七舎のうち慈眼、松林、普賢、蓮乗、宝樹の五ヶ院が建立されましたが、それでも寺運は上向かず、遂には慈眼院のみとなりました。様々な歴史を重ね、そしてようやく学徳秀れた第十六世実應法印が自ら霜をふんで山林経営に粉骨し、入りては法灯を高くかかげ、諸堂修復に砕身され、この後寺運日を重ねてよみがえり、今日に至ります。本堂には国指定の重要文化財「千手観世音菩薩立像」と「薬師如来坐像」が安置されています。

今回このような大変歴史あるお寺での採取作業になります。山の中腹にある本堂まで真っ直ぐに延びる365段の階段を登り、途中にある仁王門をくぐって、更に階段をしばらく登って行くと、ゆうに300年は越えると思われる杉と檜木の木立が目に入ってきます。この階段を登りきるとようやく本堂に辿り着きます。

本堂のまわりには数百本の檜木の大径木の森が広がります。檜皮葺の建物もたくさんあったため、かなり昔から檜皮の採取がされていたようです。今回はそんな数多くある檜木の中で、この山では中くらいの檜木（直径70㎝）の採取の様子をお話ししたいと思います。

名　称●竹林山 常勝寺
場　所●兵庫県丹波市山南町谷川2630
道　具●ヘラ、ぶり縄、腰鉈（こしなた）、胴切包丁など

常勝寺での檜皮採取

1 最初のヘラ入れは、檜木根元の外周形状に注意して最もスムーズにヘラが入れられる箇所を決めます。木を傷つけないように充分注意しながら絹皮（きぬかわ）（樹皮下の形成層表面の皮）をなるべく残さないように、この木では20㎝前後の皮幅で手が届くところまでヘラを使い、皮が割れないように注意して剥きます。

2 ヘラが届かなくなると、皮を両手でしっかりと持ち、下方に引っ張るように木から徐々にたぐり上げていきます。そこそこ絹皮がついてきたので、この木は3ｍ50㎝ほどの高さまで剥き上げました。

3 根元の剥き作業が一周終わるとたこ足状の皮の下にぶり縄を掛けていくのですが、この木は太く、手が回りませんでしたので、ぶり縄の両端ともあらかじめ皮の下に通しておきます。

4 皮が折れたりしないように注意しながら、皮の下に通したぶり縄を一段目、二段目と掛けます。二段目は剥き上げているギリギリいっぱいの所に掛けます。

5 二段目まで登ると、一段目をふりほどき腰縄にして、両足とも二段目のてぎ（ぶり縄の端に付けた木の棒）に登り、ナタで皮を切り落とします。この木は斜面にあり根元で木の表と裏では50㎝ほどの差がありましたので、切り落とす時は20～30㎝の段差をつけて切り落としました。

6 登ってから次の段にぶり縄を掛けていく場合、絶対にロープを離さないようにします。登ってからは3ｍの長さを目安に採取していきます。

7 枝がある近くまで登ってくると、この木では、風によるゆり切れが見られました。中の絹皮までは切れていないので、外皮は使えませんが、剥き上げることにしました。短く切れてしまうような木は採取をやめる場合もあります。

8 枝がある所まで登ってくると高さは10ｍを越えていると思います。高い所から皮を下に落とす場合、地面で折れ曲がったりしないようにする為、水平に着地するように注意して落とします。

9 枝が多い所になってくるとぶり縄を使わず、枝を足場に作業します。檜木は枯れ枝になっても大変丈夫なので充分体重を支えてくれます。枝の中でロープを使うと大変手間がかかりますので、少々危険ではありますが注意して作業し剥き上げていきます。このあたりで高さは15ｍ程でしょうか。枝も密集してきて短い皮しか採取できないので、もう少しで採取は終了です。

10 採取作業が終わると、ぶり縄をつたって地上に下ります。この時は両足で木をはさみ、手はすべらないようにしっかりと持ちかえて握りながら下ります。

11 地上に下りると、垂れ下がっているぶり縄を長めに持って左右に勢いよく振って落下させます。

12 採取した檜皮はきれいにそうじをして小束にしてから結束して、集積場所まで担いで運びます。後の荷造り作業がしやすい平らな広い場所が、今回は比較的近い所にありましたので、助かりました。よい場所がない場合は､20～30分担ぐこともあります。

檜皮採取を終えて

今回採取した木は直径70㎝で、剥き上げた高さは15ｍ余りと思われますが、作業にかかった時間は3時間弱ほどでした。一般的に採取される10年前後を今回はかなり過ぎていたので、厚皮になり、表皮は風化していて使えない部分もありましたが、これまで何度も採取されていますので充分に使える檜皮が採取できました。このような大径木が数多くある森は、経験の浅い若い職人達にとっては技術向上において大変よい修業の場でもあります。

今後もこのような森が守られていくことを願います。森が守られる事によって技術も継承されていくことでしょう。

■準会員 名簿

［五十音順］

No.	氏　　名
1	青木　胤勲
2	青木　照幸
3	青木　優来
4	青山　　亨
5	赤嶺　　怜
6	朝野　達也
7	芦田　健太
8	蘆田　祐明
9	足立　健一
10	安部　悟司
11	飯野　映稚
12	池田　陽輔
13	石井　　潤
14	石川　良三
15	石塚　健一
16	市原　　健
17	一色　律男
18	井手荘和可
19	伊藤　貴弘
20	伊藤　延行
21	井藤　　浩
22	伊東　洋平
23	糸賀　一道
24	犬飼　傳吉
25	入江　　匠
26	岩﨑　　正
27	岩﨑　　剛
28	上野　英樹
29	上村　　淳
30	内田　祐太
31	梅澤　朋充
32	瓜生　玉樹
33	大城戸茂之
34	大崎　　悠
35	大塚　　駿
36	大藤　義一
37	大西　康純
38	大西　謙之
39	大野　沙織
40	岡田　和申
41	緒方　伸也
42	岡野　史和
43	岡山　春樹
44	奥田　治郎
45	奥田　正博
46	奥田　素子
47	奥田　　譲
48	尾崎　良助

No.	氏　　名
49	小澤　翔太
50	片岡　　晶
51	方山　和也
52	勝部　哲也
53	加藤　貴規
54	金谷　史男
55	金儀　　豊
56	包國　眞匠
57	金子　英生
58	上出　　健
59	亀井　輝彦
60	嘉本　洋士
61	川合　裕己
62	川田　徳宏
63	川西鹿久介
64	河野修二郎
65	河村守左史
66	上林　大記
67	菊池　　保
68	岸田　直彦
69	北野　和久
70	吉川　圭一
71	吉川　晋二
72	木下　和也
73	木下　真介
74	木村　健太
75	清田　幸臣
76	國本　雅史
77	熊谷　一雄
78	栗山　光博
79	栗山　雄二
80	栗山　芳博
81	小池　一平
82	古川　一敏
83	古川　　誠
84	古川　　衛
85	児島　真介
86	後藤　哲夫
87	小西　繁信
88	小林　正之
89	小林　芳治
90	小原　一樹
91	駒　　宏樹
92	近藤　竜太
93	酒井　慶伍
94	寒河江清人
95	阪上　和枝
96	坂口　哲也

No.	氏　　名
97	櫻井　　零
98	佐々木孝則
99	澤田　昌己
100	塩田　隆司
101	島崎　秀徳
102	須賀　　均
103	須賀　将志
104	杉井　喜雄
105	杉谷　　功
106	瀬戸　龍哉
107	髙島　優雅
108	高橋　健一
109	高平　勝也
110	竹森　暢哉
111	武山　貞秋
112	武山　貞範
113	田中　順也
114	田中　慎一
115	田中智紗衣
116	寺田美乃里
117	戸梶　憲幸
118	時長　祐貴
119	中尾　隆二
120	長﨑　貴宣
121	長野　直人
122	永原　光敬
123	中村　裕司
124	中森　千尋
125	西内　久恵
126	西　　裕之
127	西堀　大樹
128	西村　拓馬
129	西村　聡央
130	西村　信生
131	西村　好永
132	西本優太郎
133	西脇　征志
134	沼澤　修一
135	野上　邦彦
136	野谷　嘉邦
137	長谷部直之
138	林　　直希
139	東　　友一
140	樋口　裕二
141	檜　　篤広
142	平片　功一
143	平田　将大
144	平野健太郎

No.	氏　　名
145	平野　裕也
146	深本　英昭
147	福岡　亮太
148	藤岡　健太
149	藤中　竜也
150	藤吉　宏明
151	渕上　大輔
152	古川　和樹
153	細見　和希
154	細見　知憲
155	細見　　裕
156	堀内　博樹
157	本多　亮貴
158	毎熊　徳満
159	毎熊　知也
160	前尾　康雄
161	松木　裕紀
162	松島　俊一
163	松村　省弥
164	松村　純孝
165	松村　正徳
166	松村　有記
167	三上　和夫
168	三上　　直
169	三木　宏祐
170	道繁　　康
171	三ツ出俊平
172	緑川　幹雄
173	峰地　幹太
174	三又　誠也
175	向田　　学
176	村岡　伸康
177	村上　章浩
178	村上　貢章
179	森　　壮馬
180	森山　淳希
181	矢野　友則
182	山久　直也
183	山口　成貴
184	山口　宗平
185	山崎　大輔
186	山城　直也
187	吉川　一生
188	吉川　智庸
189	和田　琢男
190	渡辺　泰輔
191	渡辺　昌弘
192	渡部　雄太

（2013.4.1 現在）

発　行　所
京都市東山区清水二丁目 205-5
文化財建造物保存技術研修センター内

公益社団法人　全国社寺等屋根工事技術保存会

TEL 075-541-7727 FAX 075-532-4064
http://www.shajiyane-japan.org

手練 **第 9 号**
平成 26 年 8 月 31 日発行

あ と が き

日本貿易振興機構（ジェトロ）が本年 3 月に公表した「日本食品に対する海外消費者アンケート調査」（モスクワ、ホーチミン、ジャカルタ、バンコク、サンパウロ、ドバイの 6 都市対象）によると、好きな外国料理は、6 都市合計では「日本料理」がトップだったことが分かりました。理由の 1 ～ 3 位には味の良さ、健康に配慮、洗練されている・高級感が挙げられています。一方で価格が高いとの回答もありました。

私たち保存会の手がけている檜皮・柿・茅葺という日本古来の屋根工事の技法も、将来世界に認められ、世界中に広まっていけばと思うと、夢も広がっていくばかりです。

手練 SHUREN

第９号

公益社団法人　全国社寺等屋根工事技術保存会